

栄養失調で大半の子供が死に、停車毎に鉄路側に捨てて地獄の様相であった。

我々は無事天津に到着收容されたが、ここでも毎日のように死人で悲惨なものであった。十二月末無事に日本に引揚げ故郷に帰宅することが出来た。私は河南省各地を転戦し無事生き永らえ、八月終戦と同時洛陽で武装解除を受け、現地で在支の長い現地召集の戦友三十人と解除を受け、家族の引揚げ地天津に向ったが目的を果せず四か月間終戦後の大陸を迷い、三月末日連雲港から佐世保に上陸、帰路の鉄道は窓から出入し苦しい車中であった。無事に故郷に帰れる喜びで一杯であった。車窓から見る本土の焼ヶ野が原と化した姿を見てよく戦ったものだと思った。

四月初めに帰宅し、先着の妻と二年振りの再会でお互いに無事を喜び合った。

引揚後故郷の役場に就職三人の男の子に恵まれ日夜夫婦努力し今では三人の子供も独立し、孫も五人もみながら年金生活をしております。今でも時折終戦引揚等の夢を見て当時の悲しみを思い出します。

恐怖と絶望の日々

福島県 土田 ヒサ子

昭和二十年八月九日、忘れもしないソ連参戦のニュース……。私共の街、北支・平地泉はソ連領から飛行機で五、六分の至近距離だった。領事館の命令で、老人婦女子は、早急に荷物（食糧、衣類）をリュックに入れ、十日早朝駅頭に集合とのことだった。全員無蓋車に乗せられ、七時出発した。八月でも朝夕は寒気厳しく、心細さと不安感で手足がぶるぶる震え、誰も口をきかなかつた。主人は職務上同行不能だった。

私は六月に長女を出産したばかりで、身体はくずれず、友人の世話になりながら、夕刻張家口に到着した。その夜、鉄道宿舎に宿泊することになった。風呂にはいろうと衣類を脱ぎ、わが子を抱いて湯ぶねにはいろうとしたとたん、八路軍来襲とのこと、これが最後かと思つた。十五日、ラジオの前で終戦の詔勅を聞き、皆で手を

取りあって泣きぐずれた。

十六日、張家口から北京へ向かう無蓋車に雨が容しやなく降りそそぎ、全身びしょぬれになった。雨がやめば日照りで、乳幼児は日射病、赤痢、疫病も続出した。死亡すれば、その駅付近に埋められた。

夜になると砲弾の音でほとんど眠れない。やっと北京に着き、日本人学校に収容された。北京から天津へトラックに乗せられ、振りおろさんばかりだった。幾多辛酸難苦の末、やっと天津の日本染料工場に収容された。ここで約三か月を過ごした。

十一月末、天津からアメリカの貨物船に乗せられた。船中では、アメリカ兵（黒人も）に荷物を点検され、私は時計、指輪等を没収されてしまった。私どもは船底に押しこまれ、傷痍軍人、手足を失った看護婦さん達も多く、正視するに忍びないありさまだった。便所には集団でいった。船足が遅く、船酔いになり、子ども達は伝染病になり、死亡する。遺体に重石をしぼりつけ、海底に沈められた。その母親は、列車の中で疫病で一人亡くし、船中でジフテリアで一児を失い、ご主人は砲弾で死亡し

たという悲運の方だった。

四日日、やっと博多港に入港し、祖国の山河をこの目で見たときは、涙々で全員で「万歳」を絶叫した。

今あのとときのわが子は四十五歳、平和な日々を過ごしている。しかし、今でも船上から水葬しなければならなかったあのお母さんの断腸の叫び声が耳から離れない。それに、引揚げ仲間が一人、二人と亡くなり、心さびしい限りである。

さいわいにも、主人は七十五歳ながら元気で働いている。この平和が永遠に続くようにと心から願う昨今である。

弟を失い、北支より

愛知県 小沢 三千江

昭和十五年頃私の父（信義）は東邦電力（今の中部電力）に勤務しておりました。上役の方からのすいせんとすすめがありまして、電気の技術者として是非にこのこ